

C 五郎沼と嶋の堂千手観音

五郎沼の歴史と自然

⑤ 樋爪氏の信仰を示す経塚

経塚は、平泉藤原氏の時代である 12 世紀に東北地方でも多数造営された。山形県と岩手県が群を抜いて多いとされる（八重樫忠郎「東北の経塚－分布傾向からの考察－」『平泉文化研究年報』2）。県内には 30 か所以上の経塚の存在が知られており、一関市から盛岡市までの北上川流域の密集度が高いことが特徴とされる。

末法思想の流行は、前九年・後三年合戦の時期とも重なる。奥六郡を安倍氏・清原氏から引き継いだ平泉藤原氏は、その一門を中心にこの地に経塚を造営したものと考えられている。紫波郡や盛岡市は、樋爪氏一族の勢力圏であったことから多くの経塚が確認されている。かつて志波郡であった飯岡地区の湯壺経塚（盛岡市湯沢）では、常滑産二筋文壺、内村遺跡（盛岡市下飯岡）では、経塚に埋納したとみられる常滑大甕が発見されている。西域の一本松経塚（盛岡市繫）からは、渥美灰釉壺（県指定有形文化財）が発見されている。さらに、城内山頂遺跡（矢巾町煙山）から渥美袈裟^{け さ た す き}襷文壺が発見されている。城内山山麓に安倍道と伝えられる古道や寺院跡があることから、経塚の可能性が高いといえる。

平泉藤原氏の居館である豊田館擬定地（奥州市江刺区）近くの経塚からは、中国産の白磁四耳壺（奥州市指定有形文化財）が出土しており、経壺として使用されたと推測されている。また、溝跡から 12 世紀の能登半島の珠洲系陶器と大日如来坐像を表現した塙^{せんぶつ}仏（レリーフ状の仏像）と認められる破片が出土していることから、ここが仏堂を併設した豊田館であったとされている。塙仏の出土は、豊田館に宗教施設が併設されていたことを意味し、この構成は比爪館跡と共通するものがある。

樋爪氏の膝元であった紫波町では、経塚または経塚とされる遺跡が 5 か所で確認されている。埋納時期は不明だが、これらは 12 世紀の平泉藤原氏時代に造営されたもので、発願者として樋爪氏が想定されるのが自然であろう。

山屋館経塚は、平成 7 年（1995）に発掘調査が行われ、4 基の経塚が確認されている。経典を納めた容器である常滑三筋文壺や須恵器系波状文四耳壺（石川県珠洲産）、箱状木箱の破片などから、平安時代後半に造営されたものと推測されている。経塚から出土した陶器壺・蓋石・木箱残欠など 4 点は、保存状態が良好で、「山屋館経塚出土品」として県指定有形文化財になっている。

山屋館経塚は、山屋地区から砂子沢・閉伊地方に至る交通路途中にある。比爪館跡から西方に位置する新山神社奥宮（土館新山寺跡）にも経塚が確認されている。新山神社奥宮

は、出羽三山の遥拝所であったという伝承がある。明治 17・19 年（1884・86）に古鏡・懸仏などが発見されている。12 世紀の和鏡は、樋爪氏一族の奉納と考えられている。ここから出土した常滑三筋文壺（紫波町指定有形文化財）は、経筒と推測される。新山神社奥宮が立地する新山山麓東方には奥大道が南北に縦走している。

紫波町内の経塚の実相を総体的に把握することは今後の課題であるが、これらの経塚は志波の四方を守る鎮守社と同様に、その入口を宗教的に結界しようとする意図があったのではないだろうか。